

《書 評》

沖 公 祐 著

『余剰の政治経済学』

〔香川大学経済研究叢書 23〕

2012年7月 日本経済評論社刊 x+209+17 ページ

本書の構成

本書『余剰の政治経済学』は、はしがき (pp. iii-vi)、目次 (pp. viii-ix)、凡例 (p. x)、本文 (1-206 頁)、あとがき (207-9 頁)、事項索引・人名索引・文献一覧 (全 17 頁) からなる、マルクス経済学原理論の研究書である。

本文は、

第一章 市場像の源流——思想的考察

第二章 商品論の再構成

第三章 貨幣機能の二重構造

問奏 I 貨幣のイデオロギー

第四章 蓄蔵貨幣の形成と資本の運動

問奏 II 資本主義のマテリアリティ

第五章 労働力商品化の多型性

の七部分からなり、そこには「過剰性」という観点が貫く。著者は、「過剰としての市場」(p. v) [第一章～第四章] と「資本主義にとっての過剰」(p. v) [第五章] という「二つの過剰性」(p. v) を、本書で究明すべき課題とする。

本書の紹介

二つの交換論——「奢侈交換論」と「必要交換論」

では、「過剰としての市場」とはどのようなことか。著者は、「交換を引き起こす原動力は何か」(1 頁) と問う。「欲求の無限性」(5 頁) と応じるであろう「近代的人間観」(2 頁) とは対照的に、経済学黎明期の諸思想家 (J・ロック、D・ヒューム、J・ステュアートなど) は、「欲求の有限性という古典的観念」(10 頁) を共有していた。彼らにとって「欲求 want とは、基本的に、必要 (必需) necessary に対する欲求 needs

のこと」(6 頁) であり、必要が満たされれば止む情念であった。こうした欲求観のもと、彼らの思索は「必要が充足されたうえで、なお交換が行われるのはいかにしてか」(11 頁) という問題へと向かう。そして彼らは、無際限な「奢侈 luxury」(5 頁) を求める「欲望 desire」(6 頁) に交換を拡大させる原動力を見出し、「奢侈交換論」(9 頁) とでも呼ぶべき議論を展開した。

A・スミスも、情念のこうした階層的理解を先行者ならびに同時代人と共有した。しかし、彼の交換論は、「自分の『欲しい want』ものと他人の『欲しい want』ものを交換」(15 頁) する「必要交換論」(11 頁) であった。著者によれば、「スミスは、分業の拡大→生産力の上昇→余剰の増大→資本の蓄積→人口の増加→分業の拡大というスパイラルな成長論を唱えることで、必要交換論の枠内でも需要問題は解決されると主張」(12 頁) し、「市場像の転換」(9 頁) をもたらしたのだという。

「貨幣の資本への転化」論批判

マルクスは、「独立生産者から成る単純商品生産社会」(15 頁) というスミス交換論の想定に瑕疵を見る。しかし、『資本論』冒頭部分に「資本主義的生産関係 (資本—賃労働関係)」(17 頁) を「捨象した商品・貨幣論」(17 頁) を置き、「スミスと同型の流通形式」(22 頁)、「W—G—W によって商品と貨幣を把握」(19 頁) する「単純流通論」(19 頁) を展開したことで、資本の導出に「決定的な断絶」(21 頁) を残した。マルクスは、労働力商品がこの「断絶」を埋めると考える。しかし著者は、労働力商品が「架橋するのは、可能だが無内容な G—W—G と内容をもつが不可能な G—W—G' とのギャップ」(21 頁) であり、そのことによっては W—G—W と G—W—G' との間の「断絶」は埋まらないといわれる。

ここから、資本を把握する正当な視角としての「奢侈交換論」、厳密には、「腐敗しやすい貯蔵不可能な余剰を耐久性のある貯蔵可能な余剰と交換する」(25 頁)、ロック固有の「余剰交換論」(25 頁) が高く評価されることとなる。こうした「余剰の貯蔵可能性」

(25頁)への関心を著者は、蓄蔵貨幣論を提示したマルクスにも見出し、この点の更なる考究を通して、「価値増殖を目的とする」(27頁)資本の把握は、「必要」を満たさんとして「欲求」が先導する「必要交換論」でも、「奢侈」を求める「欲望」に牽引された「奢侈交換論」でもない、「余剰を貯蔵可能な形態で保持し、できうるならば、余剰を増やそうとする『欲動Trieb』」(27頁)の観点から取り込まれるべきとする。

ゲマインヴェーゼン論

では、資本はどのように導出・把握すべきか。この問題が、第二章と第四章とで開示される。間に挟まる第三章では、間奏Ⅰならびに間奏Ⅱと併せて、本書における資本導出の鍵の一つである、「貨幣の価値を知悉することができないというディレンマ」(94頁)が提示される。と同時に、価値形態論・価値尺度論および流通手段論に関する著者独特の論争的理解も示されている。

資本導出論の紹介に集中するならば、第二章では、著者に「余剰の政治経済学」を着想させた「商品交換は、共同体の果てるどころ、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」という、「交換過程論におけるマルクスの指摘」(57頁)が突き詰められる。著者は、この部分の「『共同体』は Gemeinwesen であって、一般に共同体を指すドイツ語である Gemeinde あるいは Gemeinschaft ではない」(50頁)点に注目する。そして、ゲマインヴェーゼン Gemeinwesen が「維持・再生産に関わる概念であることはまず間違いない」(51頁)とし、先の「マルクスの指摘」の内容を、「社会の維持・再生産に必要な物の残余、すなわち、余剰が交換されるということ」(51頁)であるとす。しかし、それぞれに自足するゲマインヴェーゼンが、あえて他のゲマインヴェーゼンと交換を行わなければならぬ強い理由などありはしない、ということにならないか。その通りだと著書はかわれる。

市場は商人がつくる

では、なぜ商品交換は生じるのだろうか。「ゲマインヴェーゼンとゲマインヴェーゼンの間、としばしばパラフレーズ」(60頁)される「マルクスの指摘」に見出される〈間〉が、「空間的な広がりをもつ場であるとすれば」(61頁)、そうした「ゲマインヴェーゼンの〈間〉の交換」(61頁)は、「専業の商人あるいは商

業組織に担われることになる」(61頁)と著者は断じるのである。そこに、「単純流通 $W-G-W$ の資本の運動 $G-W-G'$ への転化とは対照的な、商人(資本)の先行性が見出される」(62頁)のだという。つまり、商品交換とは本来、「商人(資本)」の介在があって生じるものなのであり、ここに、市場は「商人(資本)」によって形成されるという著者の市場像、ゲマインヴェーゼンにとつての「過剰としての市場」が提示されることとなる。

蓄蔵貨幣と市場の常態

第四章では、著者の市場像がさらに敷衍され、「資本の流れ」(126頁)が導かれる。古典派経済学そして現代の主流派が、もっぱら流通手段としての貨幣に着目するのに対して、マルクスは蓄蔵貨幣というかたちで「貨幣の富としての性格、すなわち、貨幣の資産性」(120頁)という問題に気付いていた。しかし、『資本論』へと至る思索のなかで、貨幣数量説批判という問題意識にも影響され、蓄蔵貨幣は「貨幣の富としての性格や自己目的性といった問題系」(117頁)の内には位置付けられず、「主として流通に必要な貨幣量を調整する『蓄蔵貨幣貯水池』として受動的な性格」(117頁)をもつものに「貶められることになった」(120頁)。

これに対して著者は、従来ほとんど注目されてこなかった『資本論』の「二つの理論的前提」(122頁)が、『資本論』の蓄蔵貨幣論に示されているとする。著者はそれを、(1)「必要に対する欲求に対応していないような絶対的な余剰」(122頁)がある社会の想定、(2)「市場における交換には時間がかかるということ」(122頁)とまとめる。

そして(1)の下では、「市場には必要物を入手するためだけでなく、必要を超える余剰を得るためにも商品が投げられ」(122頁)、貨幣のかたちでの余剰の保有が志向される。また、(2)であるがゆえに、買い手の手元に貨幣がある、つまり「蓄蔵貨幣が形成されている」(122頁)ことが、「購買のための条件をなす」(122頁)とされる。こうした蓄蔵貨幣論の検討を通して、著者は、「予め必要に対する欲求が確定したうえで販売がなされ、続く購買に伴って偶然的に生じた残余が受動的に蓄蔵貨幣になるというのではない。貨幣の資産性に牽引されるかたちで、手持ちの全商品を貨幣に換えるという欲動がまず惹起され、そのうちの必要に対応する部分が止むに止まらず購買に出勤す

る」(126頁)といわれるのである。

沖・資本論

ここからさらに議論は展開して、「資本の流れ」が導かれる。ここまで著者は、(1)マルクスによる「貨幣の資本への転化」論は首肯しえない、(2)そもその出発点とされた $W-G-W$ は市場の態様を示してはいない、(3)市場は、一方的に販売が志向される場であり、「余剰としての貨幣が不断に形成される」(127頁)ことを論じられた。とすれば、「このような市場においては、余剰としての貨幣を用いて、さらに余剰を増やすような活動が当然にも生じてこよう。すなわち、時間的・空間的な価格差を利用して商品を転売し、増殖を果たす商業がそれである」(128頁)。蓄蔵貨幣論の検討を通して、市場における「貨幣の滞留」(126頁)が取り出されるだけでなく、さらに進んで「貨幣蓄蔵の欲動を抑圧」(152頁)する「転売」というかたちの「資本の流れ」が導かれる。

しかし、「交換性そのもの」である貨幣を握りしめる替わりに一旦手放し、悪くすると売れぬかもしれない商品を「余剰の保蔵形態」(128頁)とする行為は理解に苦しむとはいえないか。そんなことはないのだという。なぜなら、「もしも時間の経過によって、貨幣が大きく減価するならば、貨幣で余剰を保持することは道理に合わぬこととなるからである」(128-9頁)。加えて、諸商品の価値表現の材料として「商品世界のメンバーから排除」(80頁)されており、自らの価値を表現しえない「貨幣価値の知悉困難性」(148頁)は、「商品価値の変化も本当の意味では知りえない」(129頁)ことに帰結する。そうであれば、「資産価値の維持は、最も値上りの見込める商品へと次々と乗り換えることによってしか果たされえず、したがって、余剰の保蔵は、最終的には、蓄蔵貨幣の滞留から資本の流れへと進まざるをえない」(129頁)。ここに、ゲマインヴェーゼンにおける「絶対的な余剰」を積極的に処理する機構としての沖・資本論(市場論)が提示されることとなる。そこで主導的な役割を担うのが、「情報を共有しあう組織・集団」(132頁)としての「商人」であることはいうまでもない。

市場にとっての過剰性——労働力

このように著者は、「過剰としての市場」という一つの「過剰性」を論じる一方、考究すべきもう一つの「過剰性」、「資本主義にとっての過剰」という問題

にも取り組まれる。

著者は第五章で、この過剰性を労働力に見る。その点では、マルクスと選ぶ所がない。しかし、『資本論』における「マルクスの労働力の価値規定は、労働過程の単純化と生活手段の完全な商品化(〈再生産〉過程の単純化)という二つの想定」(162-3頁)に規定されたことで「労働力価値の水準が生活手段の価値に帰着」(162頁)する組み立てとなり、「労働力商品が単一の像を結ぶ」(162頁)点に限界を抱えている。それは「労働力の外部性=過剰性というマルクスの洞察を活かすものではない」(163頁)のであり、従来考えられてきた「労働者の生活手段の価値、その子供の生活手段の価値、養成費は、一定の条件のもとでは、労働力価値を規定すると考えられるとしても、それは労働力商品化がとりうる多様な型のうちの一つでしかない」(180頁)とされる。「マルクスの洞察」の積極的な意義が、労働力の価値規定における条件依存性に見出されるわけである。しかしなぜ、労働力商品は原理的に「単一の像を結ぶ」ことがないのか。

熟練と労働主体の生活過程——資本にとっての本源的な外部性

著者はその理由を、労働過程に随伴する「熟練という契機」(163頁)に求める。すなわち、「労働の熟練は、過去の労働経験の積み重ね」(182頁)に由来するが、異種労働の経験は「労働に関する多様な知識を労働者にもたらし」(182頁)、「generalityの方向へと向かう熟練」(183頁)、「横の熟練」(182頁)をもたらすのだという。また、同種労働の反復は、「特定の労働過程に関する知を蓄積していくことであり、specialtyとしての熟練」(183頁)、「縦の熟練」(182頁)をもたらす。こうした縦横の「熟練」は、「生産手段に対する熟練」(183頁)、そして本書で強調される「人間に対する熟練」(183頁)との両方を覆うのであり、それらは「労働者に内属する力能である」(187頁)とする。

このように「熟練」が労働過程に随伴するものであるため、資本は、「商品生産の言わば副産物として」(187頁)、無料で「熟練に基づく労働生産性の上昇のメリットを享受することができる」(187頁)。他方で、「熟練」は「労働者の個体から切り離しえない」(187頁)ために、資本が「熟練」から享受するメリットは「個別労働者の存在に頼らざるをえない」(187頁)。「熟練」がもたらすこうした正負の効果が、多様

な労働市場を生じさせると著者はいわれる。

すなわち、(a)「資本から自立した関係を有する可能性」(188頁)をもつ「横縦両面の熟練を備えた労働者」(188頁)からなる「自立型労働市場」(188頁)。(b)部分工程への固定化により「横の熟練」を解体され、「特定の個別資本のもとで継続して労働すること」(190頁)に意義が生じる労働者と、「縦の熟練」の深化からメリットを得る資本とからなる「相互依存型労働市場」(189頁)。そして(c)「労働過程の細分化」(193頁)が進展し、「熟練を高める余地」(194頁)を奪われた「不熟練労働者」(194頁)からなる「従属型労働市場」(193頁)の三型である。これら(a)~(c)のいずれの型の労働市場においても、資本は、労働力商品の供給の基礎をなす労働者の生活過程(〈再生産〉過程)までは制御しえないのであり、この点に「労働力が資本に対してもつ本源的な外部性」(195頁)が示されるのだという。

本書を読んで

以上、評者が取り上げ易い部分に重点を置き駆け足で本書を概観した。このため、本書評は本書の正確な縮写ではない。しかし大枠として、資本導出論と労働力商品化論とに対する根本的な再構成を企図される本書は、近年取り組まれつつあるマルクス経済学の刷新と共鳴する。

それだけでなく、「過剰としての市場」を扱う部分では、価値を「類」/使用価値を「種」と捉える商品の二要因論(77-81頁, 105頁)、価値形態論の比喩論(隠喩・換喩・提喩)的解釈、さらには価値形態論と同型の関係性が価値尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣との間に読み取られ、「前者の素材性が後者によって表現される」(87頁)ことを論じる「代表Vertretung」(87頁)論、そこから導かれる「貨幣の二つの身体」論(101-5頁)など、著者独自の見解が開示されてもいる。加えて、「形式的使用価値」概念をマルクスから継承し、「有用性に解消しきれない剰余=過剰性」(106頁)と解釈されたことなど、その正否の判断には本書のさらなる耽読とともに、簡単なことではないがおそらくは著者と同水準の沈潜が必要となる。

また、「資本主義にとっての過剰」が扱われる部分では、異種労働の経験を通して高まることされた労働力の汎用性に対して、「横の熟練」という概念が定立されている。「熟練」といえば「縦の熟練」を指すという

理解を、著者の労働過程論は相対化させるのであり、いま一度、評者の理解を再点検してみるよう促される。さらには、著者のいわれる「人間に対する熟練」が定立できるとした場合、そうした「熟練」が資本主義的な労働組織の中で深まることの意味を、評者なりに考えてみたいとも感じる。

これら本書を通して気付かされた諸論点は、著者が読者へ向けて提示された宿題と捉え、評者なりの回答を今後に期しつつ、沖先輩渾身の御労作に対するささやかながらの書評の結びとしたい。

(泉 正 樹)

福澤直樹 著

『ドイツ社会保険史 社会国家の形成と展開』

2012年6月 名古屋大学出版会刊 v+291+39 ページ

本書は、著者の長年にわたるドイツ社会保険史研究の成果が結実した労作である。著者はすでに1995年に、フライブルク大学に提出した博士論文をPeter Lang社より上梓しているが、日本語の単著としては本書が初作品となる。本書の構成は次の通りである。

序論 社会保険の起源と展開

第I部 第二帝政期の社会保険

第1章 ビスマルク期労働者保険の生成

第2章 労働者保険の展開とライヒ保険法の成立

第II部 両大戦間期の社会保険

第3章 ヴァイマル体制下の社会保険の展開

第4章 国家的失業給付制度の生成と失業保険の成立

第5章 大不況と社会保険—ナチス体制への移行と社会保険—

第III部 第二次世界大戦後の社会保険

第6章 西ドイツの社会秩序と社会保険—戦後年金改革に向けての社会給付論議を中心に—

第7章 東ドイツ社会主義体制と社会保険

第8章 現代ドイツの社会国家体制と社会給付

結語 近現代国家における社会保険の意義とそのゆくえ

序論では、本書の課題が、「ドイツ社会保険の通史的分析を行うことによりドイツの近現代の共同性のあ